

民芸メンバー 戦前フィルムに

思想家の柳宗悦やなぎむねたけ、陶芸家の浜田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ。大正から昭和にかけて、日用の工芸品に美を見いだす「民芸運動」に組み込まれたメンバーらの姿を記録したフィルムが見つかった。戦前のメンバーの映像は貴重で、公開に向けてデジタル化の作業が進んでいる。

リーチ撮影、カナダの友人が保管

フィルムは、英国人のリーチが1934〜35年に撮影した白黒の16ミリで計5本(計70分)。晩年のリーチと親交のあった映画監督、マーティ・グロスさん(67)が譲り受け、カナダ・トロントの自宅に保管していた。

グロスさんは2012年ごろから、中身が不明だったフィルムを調べようと度々来日。柳が創設した日本民芸館(東京都目黒区)で確認してもらったなどし、人物や場所などを特定した。

フィルムは、リーチと柳が各地を訪問した様子の記録映像と判明。浜田が拠点をついた栃木県益子町では浜田や職

1934〜35年 柳宗悦との各地訪問の記録

人がろくろを回したり、窯で焼いたり、絵付けをしたりしているところが映っていた。掘った粘土を馬で運ぶ作業、柳が陶磁器を品定めする様子もあった。

京都で河井寛次郎が「型作り」という製法で作陶しているところや、後に人間国宝となる島根の和紙職人、安部栄四郎の元で職人が紙をすき、乾燥させている様子も。朝鮮半島の風景や寺院なども撮影されていた。

日本民芸館の杉山享司・学芸部長によると、民芸運動のメンバーを映した戦前の映像はあまりなく、「運動の草創期の資料として貴重だ」と評

価する。

フィルムは劣化しているため、リーチが米国やニュージーランドを訪れた際の映像などとともにデジタル化を進め、2年後に映像集としてまとめることを目指している。「人のぬくもり、そして作り手と使い手の間のぬくもりを見いだした民芸運動の意義は深い。フィルムを大学などで研究に生かしてほしい」とグロスさん。

問い合わせはグロスさんの活動を支援している民芸運動フィルムアーカイブ制作委員会事務局(090・933300035)へ。

(村瀬信也)



① 作陶する河井寛次郎(京都市)
② 栃木県益子町を訪れたバーナード・リーチ(右端)。左端は浜田庄司(いずれもマーティ・グロスさん提供)

民芸運動

美術品ではなく、庶民の日用品にこそ美があると「民芸」の考えに基づく運動。民芸は「民衆的工芸」の略。工業化や生活様式の西洋化に危機感を抱いた柳宗悦らが1925年に考え出し、提唱した。